

## There's+NP+been 文の一考察

家口 美智子

### [要約]

本稿は、There's a visitor been waiting to see you. のような there's+NP+been 文の文構造の解析を目的とする。there+be+NP+VP 文、there+be+NP+pp 文、there+have+NP+pp 文と歴史的な推移や出現する文脈のフォーマル度を比較することにより、当構文は there+be+NP+VP 文のカジュアルな文型、つまり縮約形 there's が不変化詞として機能し、完了を表す have が NP の後で省略された文構造を持つと主張する。There's a man been shot, hasn't there? という付加疑問文では、there's が文頭にあることから、存在文だと認識されるため、付加疑問部の主語に there が選択され、省略された have が助動詞として使われていると推測する。

## 1. はじめに

存在文は一般的にはフォーマルな文脈でもインフォーマルな文脈でも使用される。Quirk *et al.* (1985: 1409) によると、以下の存在文はインフォーマルな場面や vernacular でのみ使用される。

- |   |                                  |
|---|----------------------------------|
| (1) There's a man lives in China.                 | (Quirk <i>et al.</i> 1985: 1407) |
| (2) There's a parcel come.                        | (Quirk <i>et al.</i> 1985: 1409) |
| (3) a. There's a visitor been waiting to see you. | ( <i>ibid.</i> )                 |
| b. *?There has a visitor been waiting.            | ( <i>ibid.</i> )                 |
| c. *A visitor is been waiting.                    | ( <i>ibid.</i> )                 |

(1)は *Oxford English Dictionary* (以下 *OED*) (s.v. *there* adv., B. 4 e.) によると、a man と lives の間に関係代名詞が省略された文構造 (there+be+NP+Θ+VP) を持つと記載されている。本論では TV 文 (there と VP の頭文字をとっている) と呼ぶ。Ukaji (2003) によると、初期近代英語で隆盛を誇った文型で、Rissanen (1999: 298-299) は正式な文書にも使われていたが、19 世紀にはカジュアルな文脈でしか使われなくなったとしている。また、(2) (3)は Quirk *et al.* (1985: 1409) は、完了の意味を持つ文構造であると説明している。本論では(2)を TP (there perfective) 文と呼び、(3)を Tbeen (there been perfective) 文と呼ぶ。(2)の TP 文は英語の発達の過程で、完了形が元来自動詞は be+pp、他動詞は have+pp の形であったものが、近代英語期にしたいに have+pp に収束されていく中で、there と結びついて there+be+NP+pp の形のまま現代英語にまで引き継がれているものであると考えられる。例えば、以下のような用例が *OED* で見られる。

- (4) a. There is come a Messenger before To signifie their coming.  
 [1596, Shakespeare *Merch. V. v. i* 117, *OED*]
- b. There's a change comed over him ... is there not?  
 [1848, Mrs. Gaskell *Mary Barton* vi, *OED*]

(4a)は明らかに be+come が there と結びついた文型が初期近代英語で使用されている例である。(4b)のように there's を使った場合でも、付加疑問の is there not? で is が使われていることにより is+come が完了形を形成していることがわかる。Yaguchi (in preparation) によると、自動詞としては *OED* の引用文の用例では、arrive, chance, finish, happen, get, go, rise, stop のような場所や状態の変化を表す動詞が使用されている。

come と go が主に使用され、*OED* と Corpus of Historical American English (以下 COHA、1810 年から 2009 年までの 4 億語を収録) で全体の 80%以上を占めている。

Tbeen 文は一見すると TP 文と同様に there+be+NP+pp(been)という be と been が結びつく完了形を取っていると仮定される。<sup>1</sup> Quirk *et al.* (1985: 1409) は、(3)で見たように there has は使用できないと説明し、また(5)のように there are や there was も使用できないとしている。当然のことながら、there were も使用は許可されないと類推される。(6)と(7)は Lakoff (1987: 563) の用例である。

- (5) a. There are three visitors (?been) waiting to see you.  
 b. There was a new grammar (\*been) published recently. (Quirk *et al.* 1985: 1409)
- (6) a. \*There is a man been shot. (Lakoff 1987: 563)  
 b. \*There has a man been shot. (ibid.)  
 c. \*There's a man been shot, isn't there? (ibid.)  
 d. There's a man been shot, hasn't there? (ibid.)  
 e. \*There've many people been killed this week. (ibid.)
- (7) a. There's a man been shot, there has. (ibid.)  
 b. \*There's a man been shot, there is. (ibid.)

(6a, e) より、there is も there have も使用できない。つまり there's 以外は非文となる。一方、(6d)、(7a)が非文でないとする、there's は there has の縮約形と考えることが一見妥当であるようだ。Quirk *et al.* (1985: 1409) に関して以下のような記述がある。

- (8) There's a new grammar been written. [\*A new grammar is been written.]  
 There's a visitor been waiting to see you. [\*A visitor is been waiting to see you.]

Although we cannot expand *is* to *has* (\*? 'There has a visitor been waiting'), examples like these are doubtless facilitated by the fact 's is a contraction for *has* as well as *is* (and occasionally *does*: What's it matter?...)

(Quirk *et al.* 1985: 1409)

Quirk *et al.* (1985: 1409) は直接的な断言を避けているが、(5)で暗に there is の使用の可能性あることを示唆しつつ、there's は there+has という可能性もあるとしている。一

方、Lakoff (1987: 563) が判断する(6d) (7a)の文法性が正しいなら、*there+be+NP+pp(been)*の文型を想定することは一見正しくないと言える。*there's* はどんな組成を持っていると考えれば良いであろう。あるいはこれらの構文をどのように解析するべきだろうか。本論は現代英語における *Tbeen* 文の構造解析を試みる。

## 2. 先行研究

Yaguchi (2015) は COHA を使って、TV, TP, *Tbeen* の3つの構文を分析し、それぞれの特徴を表1にあるように提示している。(TV 文は 406 例、TP 文は 88 例、*Tbeen* 文は 36 例を抽出している。) *there's* がすべての動詞形 (*there's*, *there is*, *there are*, *there was*, *there were*) の中でどれだけ使用されているかという割合と、*there's* と意味上の主語との数の不一致の割合を示している。

表1 : COHA の TV, TP, *Tbeen* 文の頻度 (生起数) (Yaguchi (2015))

		1810s-1840s	1850s-1880s	1890s-1920s	1930s-1960s	1970s-2000s
Ratio of <i>there's</i> to total occurrences	TV	47.9% (35/73)	57.7% (56/97)	84.7% (94/111)	71.1% (69/97)	82.1% (23/28)
	TP	33.3% (3/9)	62.0% (13/21)	62.9% (22/35)	23.1% (3/13)	50% (5/10)
	<i>Tbeen</i>	100% (2/2)	100% (9/9)	81.8% (9/11)	100% (6/6)	87.5% (7/8)
Number disagreement rate of <i>there's</i>	TV	2.9% (1/35)	5.4% (3/56)	20.2% (19/94)	29.0% (20/69)	34.8% (8/23)
	TP	0% (0/3)	0% (0/13)	4.5% (1/22)	0% (0/3)	20% (1/5)
	<i>Tbeen</i>	50.0% (1/2)	11.1% (1/9)	33.3% (3/9)	16.7% (1/6)	28.6% (2/7)

表1 より次のことがわかる。

- ①TV 文は *there's* の使用率と数の不一致率が 1890 年から急に上がっている。
- ②TP 文は *there's* の使用率と数の不一致率が 3 つの中で一番低い。
- ③*Tbeen* 文は *there's* の使用率と数の不一致率が一貫して高い。

また、Yaguchi (2015) は 3 つの構文が地の文でどれだけ使用されているのかを調査し

ている。there's を使用した場合、TV 文で 1930 年以前に 1 例あったのみで、他の 2 つの構文とも there's が使用された場合はすべて会話か I が視点の小説などの地の文で使われている。つまり there's が使われた場合は 3 つの構文とも話し言葉で使われていることがわかる。there's 以外の動詞形を使った場合は、第三者の視点で描かれる客観的なあるいはフォーマル度の高い地の文で、TV 文は 1930 年以前は 8.3% である。1930 年以降は 9.1% である。TP 文はそれぞれ 11.1% と 13.3% である。ほぼ似た傾向がみられることから TV 文や TP 文はフォーマル度が同じような文型であることが考えられる。一方、Tbeen 文の 36 例はすべて会話か I の視点で書かれた地の文にのみ現れているため、会話に限定されるインフォーマルな文型であるとわかる。

表 1 から、TV 文は 20 世紀に入ってから there's の使用率と数の不一致率が急速に増し (COHA において、一般的な存在文の平均値 10.2% より極めて高い不一致率である)、何らかの大きな変化が起こったと考えられる。<sup>2</sup> Yaguchi (2015) は、①TV 文とフォーマル度がさほど変わらないと考えられる TP 文は両者ともほぼ一貫して低いこと、②一般的な存在文より数の不一致率が高いことから、TV 文では there's が不変化詞として現代英語で機能している場合が多くなったと主張している。<sup>3</sup> つまり、関係代名詞が省略された there+be+NP+ $\Theta$ +VP という構造の TV 文に並んで there's+[NP+VP] 構造を持つ文が出現してきたと主張する。(9) の例は前者の構造を持つと考えられ、(10) は後者の例である。

(9) a. There's not a soul here can or will bake.

[1971, William Service *Feeling One's Way Across the Chasm*, COHA]

b. There's old Balaam, was in the Interior - ... he's made the raffle on the Injun;  
great Injun pacificator and land-dealer.

[1873, 'Mark Twain' & Warner *Gilded Age* xxxi. 279, OED]

(10) "Who to?" "Why, there's people'll buy anything," said the Patron.

[1954, John Steinbeck *Sweet Thursday*, COHA]

(9a) は否定文で、関係代名詞が省略されたと解析しないと意味が取れない。また (9b) のようにコンマがあるが、これは関係代名詞が省略されていると考えられ、there's が不変化詞として機能している文型であるとは見なしにくい。しかしながら (10) は 'll があることから明らかに there's+[NP+VP] 構造である。前述のとおり、Yaguchi (2015) は前者の構造の例が減り、後者の構造が 20 世紀に増えたとしている。対照的に TP 文では、there+be の be が pp と結びついて完了文として機能しているため、be 動詞が大

きな役割を果たして、意味上の主語と数の一致をする動詞を選んでいると考えられ、そのため *there's* の使用率も数の不一致率も常に低いと議論している。

さて、Tbeen 文であるが、Yaguchi (2015) は(5)、(6)、(7)で見たように文法家たちが *there's* 以外の動詞形は使えないと記述していることから、*there's* は不変化詞として機能していると主張している。20 世紀の TV 文同様、*there's* が不変化詞としてディスコースマーカのように機能し、聴者に新しい指示物に気を向けさせるような語用論的な機能を持っていると考えている。TV 文より数の不一致率が低い理由は、インフォーマルな文脈では単数の名詞が使われることが多い (cf. Biber *et al.*, 1999: 291) ので、不一致率が若干低くなるのではないかと Yaguchi (2015) は議論している。

ここで、*there's* が不変化詞として機能する他の例を見る。list 存在文にも見られる。(11)を見られたい。

(11) A: Who's attending the meeting?

B: Well, there's (\*are) John, Michael, and Janet.

(Breivik 1997)

Rando & Napoli (1978) や Breivik (1997) によれば(11)のように意味上の主語の数が何であれ、*there's* がデフォルトとして使われているところから、*there's* は不変化詞として機能していると言える。Breivik (1997) は、この *there's* は presentative signal として機能し、'I could mention' や 'Don't let's forget' という話者指向の意味を表しているとしている。実際、(11)の *there's* は統語上不要であり、意味的にも存在を表現しているわけではない。文法化してディスコースマーカのように機能している。list 文の用法は、初期近代英語期にすでに存在する。*there's* がすでに不変化詞として機能する状態にまで文法化していたかどうかは確定できないものの、(12)のように *there+is* の縮約形が早い時期に特別な機能を持っていたことがわかる。

(12) ... *there's* your Parragon, Burragon, Phillipine, Cheny, Grogru, Mow-hair.

[1668, *Head Eng. Rogue* II. xii., *OED*]

以上、本節で *there's* の特殊性と 3 つの構文の特徴を見た。次節では *there's* と 3 つの構文の歴史的発展を見る。

### 3. there's と 3つの構文の歴史的発達

Yaguchi (2010) によると there+is の縮約形としての there's は 1584 年から *OED* で見られるようになる。<sup>4</sup> 一方、there+has の縮約形としての使用されるようになったのは、*OED* では 1815 年に、COHA で 1830 年に、Corpus of Late Modern English Texts (extended version) (以下 CLMETEV、1710 年から 1920 年にイギリス人作家によって書かれた小説 1500 万語を収録) では 1796 年に初出のデータを得ている。<sup>5</sup> これらから、書き言葉で there's が there+has の縮約形として使われ始めたのは 1800 年の少し前からであると言える。there+is と比べて 200 年以上遅い。

次に 3つの構文の歴史的変遷を見る。*OED* で TV 文 (13a) は中英語期から、TP 文 (13b) は初期近代英語から存在し、<sup>6</sup> Tbeen 文 (13c) は 1786 年が初出である。

- (13) a. With hym ther was a Plowman was his brother That hadde ylad of dong ful  
many a fother. [1386, Chaucer *Prol.* 529, *OED*]
- b. There was newes come to London, that the Devil ...  
[1563, W. Fulke *Meteors* (1640) 10b, *OED*]
- c. There's mony waur been o' the race,... [1786, Burns *A Dream* iii, *OED*]

はじめにでもふれたが、TV 文は近代英語初頭に隆盛を極めた。Yaguchi (in preparation) によると TP 文も 1600 年代に良く使われていた。Tbeen 文は *OED* では 3 例しか見られないため、正確なことは明らかではない。Yaguchi (2015) は 3つの構文とも現在の英語においては急速に頻度が少なくなっていることを報告している。

以上のデータにより there's が 1584 年から書き言葉に見られたことから、TV 文、TP 文における there's は there+is の省略形であると言える。

### 4. Tbeen 文の構文解析

本章ではまず Tbeen 文の there's は there+is と there+has の可能性があることを示した上で、there+is であったという主張をしたい。

まず、Tbeen 文において there's が there+is であった可能性を探る。3 節の(13c)で見たように *OED* での初出が 1786 年で、there+has 組成の there's が CLMETEV で 1796 年に初めて使われたことを考えると、there+is であった可能性が高い。Tbeen 文はコーパス上で用例の少ない文型なので、より古い用例が見つければ、それが there+has であった可能性はますます低くなるだろう。もちろん、there+has の省略形としての there's が 1786 年以前に使用されていたという可能性も否定できない。しかしながら Yaguchi

(in preparation) の *OED* の引用文のデータによると、there's been の形で多用されるようになったのは 1950 年以降である。また COHA のデータは 1910 年以降増加し始めている。1800 年以前の、there's been の用例が少ない時代にすでに Tbeen 文の場合のみ there+has の省略形が使われていたと考えるのは少し無理があろう。

次に、Tbeen 文の源流を見る。*OED* で there+has が省略されない there+have+NP+been (以下 Thavebeen 文) の用例は見つからないものの、there+have+NP+pp の語順は用例が 7 例あり、(14a)が初出で、(14b)が最後の用例である。<sup>7</sup> (14)は seen や found が他動詞として用いられている例である。COHA では there+have+NP+pp 文は 29 例あるが(その内、他動詞は 16 例)、Thavebeen 文は 7 例ある。there+have+NP+pp 文は他動詞の用例を含めても、(15)の been を使った 1953 年の Thavebeen 文の例が最後で、それ以後この文型は姿を消している。CLMETEV では用例がない。

(14) a. There had you seen ... many a hande wrongen.

[c1489, Caxton *Sonnes of Aymon* i. 37, *OED*]

b. Wherever a pole-boat had made its way, there had the name of Jack Bannister

found repeated echoes.

[1841, *Kinsmen* I. xiv. 163, *OED*]

(15) There have great things been done to mitigate the worst human sights ...

[1953, Ray Bradbury *Golden Apples of the Sun*, COHA]

つまり、there+have+NP+pp の語順は通時的に英語になじまず、現代英語では生き残ることがほぼできなかつたと言える。ちなみに Corpus of Contemporary American English (以下 COCA、1990 年から 2010 年の 4 億 5000 万語を収録)と British National Corpus (以下 BNC、1880 年代から 1993 年までの 1 億語を収録)に 1 例ずつあるだけである。<sup>8</sup>

一方、(16)のように there is や there was が使われているケースが COHA に 3 例あり、2000 年の例もある。

(16) a. Seems if there was some been done right here in Marsden township.

[1905, Raymond Evelyn *The Brass Bound Box*, COHA]

b. There is one of them been shook entirely off my house by your well.

[1907, Stockton, Frank Richard *The Magic Egg and Other Stories*, COHA]

c. ...there was a big guy been here exactly three months, drinks water every day

at four o'clock in here...

[2000, Child Lee *Tripwire*, COHA]

すなわち、there+be+NP+been と there+have+NP+been が少なくともアメリカ英語で 1953 年まで混在していたと考えられる。

以上の事実をふまえつつ、本論は、Thavebeen 文は Tbeen 文とは異なる文型であると主張したい。その根拠として、第一に上で見たように there+has の省略形は *OED* での Tbeen 文の 1786 年の初出の後 1796 年にやっと使われ出したため、Tbeen 文の there's が there+has であったと仮定することは難しい。

第二に、COHA で、(15)のような Thavebeen 文は 7 例中 4 例 (57.1%) が地の文のフォーマルな文脈で出現している。2 節で言及したが、Yaguchi (2015) によると同じ COHA の Tbeen 文は(16)の例を含めて、36 例すべて会話か I が視点の地の文でのみで使われている。2 節で見たように TV 文や TP 文にしても there's 以外の動詞形に関してせいぜい 13%程度である。この点を考えると Thavebeen 文は他の 3 つの構文に比べてフォーマル度が高いと考えられるので、Tbeen 文と Thavebeen 文は別のものであると考えたい。副詞が前置し助動詞が主語より前に出てきた倒置の文型ではないかと推定される。

第三に *OED* の引用文で明らかなように Tbeen 文の同系の TV 文や TP 文の there's 以外の動詞形は初期の英語からある程度の頻度で見られるのに対し、Thavebeen 文の場合はあまり引用例がない。それにもかかわらず現在まで vernacular で残存しているとは考えにくい。以上の 3 点の理由により、Tbeen 文は there+is の縮約形が使われた文であると結論づけられる。

ここで、本論は Tbeen 文は、TP 文の variety であるというより、there's+NP+(have)+been 構文を取る TV 文の variety であると主張する。つまり there's+NP+have+pp の have が省略されたものであると考えられる。Harris & Vincent (1980: 806)も TV 文における have の省略を言及している。

- (17) a. There's two cars (have) left already. (Harris & Vincent 1980)  
 b. There's lots of people (have) tried to help him. (ibid.)

特に been に関しては、それ自体が have なしで現在完了を前提とし、(18)にあるように Samaaná English や vernacular では現在完了文で have がしばしば省略されることが報告されている。つまり、been だけで現在完了であることが含意されるのである。

- (18) a. She been married. (Tagliamonte 1997)  
 b. They been fixing the road. (ibid.)

(17)の TV 文同様、現在では vernacular のみで使用される Tbeen 文においても have が省略されていることはごく自然な現象であろう。TV 文がカジュアルな文型に移行する中で、there's を使用する場合は一般的になり、同時に have が省略されるようになり、また there's が不変化詞として機能し始め、Tbeen 文として認知されるようになったと推察される。実際、there+be+NP+have+been の用例は見つからないものの、初期近代英語期より there+be+NP+have+pp の用例が(19)のように OED に散見されることから、<sup>9</sup> この文型が初期の英語ですでに存在していたことがわかる。

(19) a. There's a strange Magot hath got into their Brain.

[c1645, Howell *Lett.* (1688) II. 328, OED]

b. ...that there are Serpents have swallowed children and sheep intire.

[1662, Davies tr. *Mandelslo's Trav.* 147, OED]

一方、TP 文の variety と考えるのは無理であろう。つまり不変化詞としてしか存在しない there's を含有するということは、there の後に来る be 動詞が pp と結びつくため意味上の主語の数に敏感な文型であるという TP 文の性質と矛盾する。同時に、省略されている要素 have があることと、there's 以外使えないほどインフォーマルな文型であることは、Yaguchi (2015) の「Tbeen 文は3つの構文の中で最もカジュアルな構文である」という主張と相いれる。更に Yaguchi (2015) の「TV 文において there's が不変化詞として機能している例がある」という論点と照らし合わせれば、Tbeen 文がその例であると言える。

では、(6d)の There's a man been shot, hasn't there? や(7a)の There's a man been shot, there has.で hasn't や has が使われている点をどう説明すれば良いであろう。<sup>10</sup> 残念ながら、私に根拠ある答えはない。there's が文頭にあることにより、現在時制を持つ存在文として話者に認識されるため、付加疑問を形成する際 there が使われている、<sup>11</sup> また、意味的に主たる内容を持つ a man been shot は完了であるということであるため、現在時制の has が助動詞として選択されているという説明をしたいが、今後の研究に答えを委ねたい。

## 5. 結尾

本論は、Tbeen 文の構文解析を行い、Tbeen 文は TV 文の variety であり、have が省略されている there's+NP+(have)+been というカジュアルな発話に使われる文型であることを主張した。

## 注

不備な点を詳細にご指摘くださった二人の査読の先生にこの場を借りてお礼申し上げます。当然ながら、この最終版に残る不備はすべて筆者の責任である。

<sup>1</sup> 現代英語でも *be+been* が話し言葉や方言ではしばしば完了形として使われている。*The military is been very aggressive running after the Abu Sayyaf.* (COCA, spoken)

<sup>2</sup> Yaguchi (2010) は *OED* における一般の存在文の動詞形ごとの数の不一致を調査している。規範文法の影響を受けたと思われる。1800-1849 年の期間中 *there is, there are, there was, there were* は数の不一致率は極めて低くなったが、*there's* は 10%前後で高止まりしている。Yaguchi (2015) によると、COHA についても一般的な存在文では *there's* の数の不一致率は 1800 年から 2009 年までほぼ一貫して 10.2%を上下している。表 1 の 1810 年から 1889 年まで TV 文における *there's* の数の不一致率は非常に低い。よって、TV 文は、この時期はフォーマル度はある程度高かったと考えられる。

<sup>3</sup> 不変化詞の例として *let's* をあげる。Hopper & Traugott (2003: 10) は、*let's* が文法化を遂げて、意味組成が希釈され、*let's* の *us* の統語的機能及び意味が消滅してし、不変化詞として機能している例をあげている。

(a) *Let's you and I take 'em on for a set.* (Hopper & Traugott 2003: 10)

[1929, Faulkner, *Sartoris* III. 186, *OED*]

(b) *Let's you go first, then if we have any money left I'll go.*

(Hopper & Traugott 2003: 11)

(c) *Let's us try it out.*

(安藤 2005: 882)

特に、(c)では *let's* が *let* として再解釈されている。*let's* の組成は解析できないところまで文法化が進んでいる。

<sup>4</sup> アポストロフィのない形は 1562 年が初出である。

<sup>5</sup> すべて *there's been* の初出を調査した。

<sup>6</sup> (4a)と同様に、*be* 動詞の後にすぐ *pp* が来る用例は中英語時代から存在する。

*Ther was sprongun a greet crye in Egipte.* [1382, Wyclif *Exod.* xii. 30, *OED*]

<sup>7</sup> Jespersen (1927: 111-112) は *there+have+NP+pp* のパターンを以下の 1800 年頃の例をあげて報告している。

(a) *There has scarce a day passed but he has visited him.* (Keats 4. 184)

(b) *Since the year 1614, there have no States-General met in France.* (Carlyle FR 106)

<sup>8</sup> BNC の例は会話で表れているが、文が途中で分断したケースであると考えられる。

<sup>9</sup> *OED* の TV 文 279 例中 10 例が当該文型を示している。

<sup>10</sup> 筆者が集めた TV 文や Tbeen 文のデータには付加疑問の例はない。

<sup>11</sup> Let's us try it out. (安藤 2005: 882) の用例が示すように let's が let に再解釈されている。同様に there's が there に再解釈されているという説明もできるであろう。

## データの出典

The British National Corpus (BYU-BNC) [accessed in August, 2014]

The Corpus of Contemporary American English [accessed in November, 2014]

The Corpus of Historical American English [accessed in February, 2013]

Corpus of Late Modern English Texts (extended version) [accessed in March, 2005]

*The Oxford English Dictionary*, CD-ROM, second edition (version 3.1)

## 参考文献

安藤貞雄. (2005) 『現代英文法講義』 東京：開拓社.

Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad & E. Finegan. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.

Breivik, L. E. (1997) "There in Space and Time." In H. Ramisch & K. Wynne (eds.), *Language in Time and Space: Studies in Honour of Wolfgang Viereck on the Occasion of his 60th Birthday*, 32–45. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Harris, M. & N. Vincent. (1980) "On Zero Relatives." *Linguistic Inquiry* 11: 805-807.

Hopper, P. J. & E. C. Traugott. (2003) *Grammaticalization*, 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Jespersen, O. (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part III, VII. Copenhagen: Ejnar Munksgaard; London: George Allen & Unwin.

Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: Chicago University Press.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman.

Rando, E. & D. J. Napoli. (1978) "Definiteness in there-sentences." *Language* 54(2): 300-313.

Rissanen, M. (1999) "Syntax." In R. Lass (ed.), *The Cambridge History of the English Language*, vol. 3, 187-331. Cambridge: Cambridge University Press.

Tagliamonte, S. A. (1997) "Obsolescence in the English Perfect? Evidence from Samaná English." *American Speech* 72(1): 33-68.

- Ukaji, M. (2003) "Subject Zero Relatives in Early Modern English." In M. Ukaji *et al.* (eds.), *Current Issues in English Linguistics*, 248-277. Tokyo: Kaitakusha.
- 家口美智子. (2009) 「There 接触節をめぐる there'sに関する一考察」『近代英語研究』25号: 141-150.
- Yaguchi, M. (2010) "The Historical Development of the Phrase *there's*: An Analysis of the *Oxford English Dictionary* Data." *English Studies* 91(2): 203-224.
- Yaguchi, M. (2015) "*There* in *there* Contact Clauses Revisited." *Studies in Modern English* 31: 45-70.
- Yaguchi, M. (in preparation) *Existential Sentences from the Diachronic and Synchronic Perspectives: A Descriptive Approach*. PhD dissertation.

### Summary

This study attempts to elucidate the sentential structure of *there's+NP+been*, such as “There’s a visitor been waiting to see you”, by comparing the data of its diachronic development with those of the *there+be+NP+VP*, *there+be+NP+pp* and *there+have+NP+pp* structures. It is argued that the construction concerned is an informal variety of the *there+be+NP+VP* structure in which *has/have* is omitted after NP along with the use of *there's* as a particle. In the tag question case of “There’s a man been shot, hasn’t there?”, I have made an inference that *there* in the tag question is derived from *there's* and that *hasn't* comes from the omitted *has* between *a man* and *been*.